

## 相模原市立博物館「民俗調査会」と横浜市歴史博物館 「民俗に親しむ会」の交流会記録②

加藤 隆志<sup>\*1</sup>・刈田 均<sup>\*2</sup>・羽毛田 智幸<sup>\*2</sup>  
相模原市立博物館民俗調査会 A 横浜市歴史博物館民俗に親しむ会  
<sup>\*1</sup> 相模原市立博物館学芸員 <sup>\*2</sup> 横浜市歴史博物館学芸員

### はじめに

相模原市立博物館（以下、「本館」と記す）では、各分野において市民とともにさまざまな活動を展開しているが、筆者の担当する民俗分野でもいくつかの市民の会が結成され、活動を行っている（注1）。本稿で取り上げるのは、そのうちの民俗調査会Aで行っている横浜市歴史博物館（以下、「横浜市博」と略記）の「民俗に親しむ会」との交流会（注2）の状況である。

民俗調査会Aは、平成18年(2006)7月から21年(2009)6月までの間に本館で開催していた民俗講座「民俗に親しむ会」の参加者に呼びかけて結成された二つの会のうちのひとつ（もう一つが「民俗調査会B」である）である（注3）。最初の活動は平成20年度秋に実施した秋季特別展「みてみて津久井ただいま調査中！第2期～津久井の歴史と文化～」(会期：10月4日～11月30日)において「甲州道中を歩く」を担当し、会として実際に市域の甲州道中四か宿（関野・吉野・与瀬・小原）を中心に、山梨県の上野原駅から東京都八王子市の小仏峠を経て高尾駅までの間を歩いてその間の社寺や石仏などについてデータをまとめ、地図や航空写真などを交えて甲州道中の旧道を展示した。さらに関連事業として、自分たちの実際に歩いた成果を活用して一般の市民を広報紙で募り、相模湖駅から藤野駅までの現地を歩く機会も設定した。

そして、この展示会が終了後にも活動を継続し、市内から相州大山まで至る大山道や、合併して新たに市域となった津久井地域及び、旧市域の近世期に集落があった地区などのフィールドワークを行いつつ、23年度からは新たに「民俗探訪会」として広報紙等で別の市民を募って調査会の会員が地域を案内する試みも開始している（注4）。これに対し、横浜市博の「民俗に親しむ会」は、平成20年年度に同館で開催された民俗講座「民俗の見方、調べ方」を母体として結成された会で、21年6月から鶴見川流域のフィールドワークを始めて源流部から河口までを踏破し、現在は平成27年1月に実施する展示の準備作業に取り掛かっている（注5）。

本稿では昨年度に引き続いて実施した両館の交流会のうち、第三回目（4月20日・土）の伊勢原市大山地区を

取り上げる。第四回目（11月4日・祝）の交流会については、横浜市歴史博物館の『調査研究報告』に掲載の予定である。

以下、第三回目の交流会の概要について記す。

日 時：平成25年4月20日（土）

午前9時20分～午後4時

場 所：伊勢原市大山地区

テーマ「みんなが知らない大山参り」

参加者：本館民俗調査会A会員15名（別に学芸員1名）、横浜市博8名（別に学芸員2名）

コース：小田急線・伊勢原駅 9時20分集合・9時30分発「産業能率大行」「メ引」バス停下車

①田村通り大山道「二の鳥居」→②柏尾道大山道合流点→③大山道標他（「石倉」バス停付近。ただし当日は第二東名の工事により移転して未見学）→④比々多神社（安産祈願・大山登拝の入口）→⑤易住寺（大型の唯念六字名号塔）→⑥先導師の集落（「鳥居前」バス停。旧参道散策）→⑦良弁の滝（このあたりの公園で昼食）→⑧コマ参道→⑨茶湯寺→⑩大山前不動跡（ケーブル駅裏手）→⑪大山ケーブル「追分駅」→⑫ケーブルで大山阿夫利神社下社駅→⑬二重滝（雨乞いの水もらい）→⑭阿夫利神社下社・上社への「片開きの登拝門」→⑮大山寺→ケーブルで下山、バスで伊勢原駅・解散

これまでの二回の交流会では、横浜市民が相模原に来て調査会Aの会員が説明をし、次には相模原市民が横浜を訪れて民俗に親しむ会の皆様にのご案内いただくなど、相互にお互いの市のフィールドワークを行ってきた。それに対して今回は、それぞれの市以外の地域をお互いに歩いてみると何が発見できるのか、といった点を中心に、江戸時代から信仰の山として名高く、相模原・横浜ともに地域の民俗を考える上でも欠かせない大山を選んだ。コースの設定や資料は、以前、本館で実施した民俗講座「大山道を歩く」の際のものを利用した。

当日の様相について簡単に記すと、小田急線伊勢原駅に集合し、バスに乗ってまず「メ引」バス停近くの大鳥

居に向った。通常ならバスで真っ直ぐ終点の「大山ケーブル駅」に行くところだが、今回は「みんなが知らない大山参り」をテーマとしており、かなり手前でバスを降りてさまざまなものを見学しながら歩いて行くことにした。この鳥居は、県内の主要な大山道の一つだった「田村通り大山道」の二の鳥居で、ちなみに一の鳥居は東海道から大山道が分岐する藤沢市の城南（旧羽鳥村四ツ谷）に建っている。そして、第二東名の建設で景観が大きく変わりつつある状況を見た後、安産祈願で有名であり、かつての大山登拝の入口だった比々多神社（子易明神）やいくつかの石仏を見ながら進み、途中からは旧道に入って先導師の家が並ぶ集落を歩いた。さらに、かつては水垢離の場であった良弁の滝や、葬式があると100日目（あるいは101日）にお参りし、百か日参りをすると途中で死んだ人に似た人に会えると言われる茶湯寺などを経て、大山ケーブルカーの追分駅に至った。しかし、それでもすぐにはケーブルカーに乗らず、少し上側にある追分社に行った。江戸時代までは前不動堂があったところで、大山阿夫利神社下社まで歩く場合、ここで男坂と女坂に分かれる。その後、ケーブルカーで下社に向かい、下社に参拝の前には大山へ雨乞いをする時にはここから水を汲む二重滝にも行ったほか、ちょうど春山の期間で、いつもは片開きになっている上社への上り口が全開していることを確認した。最後にケーブルカーを途中下車して大山寺にも行き、バスで伊勢原駅まで戻って終了となった。

当日は、午後から雨が降り出すあいにくの天気となり、陽気も季節はずれの寒さで大山寺へは徒歩で女坂を下る予定も変更せざる得なくなったが、それでも普通に大山へ行く時とは異なり、歩くからこそ見たり知ったりすることができるポイントがたくさんあり、フィールドワークの楽しさを十分に味わうことができた。また、両館の参加者は昼食や大山名物の饅頭を一緒に食べたり、歩きながらいろいろとお話するなど、回を増すごとに交流も深まっており、楽しい雰囲気の中で無事に実施することができた。

以下、当日参加された横浜市博の「民俗に親しむ会」の方々から寄せられたレポートを紹介していく。なお、掲載については五十音順で敬称は略させていただき、基本的にはレポートを取りまとめた横浜市博から送信された文章をそのまま掲載した。

#### 相模原博物館交流会（大山）に参加した感想 宇都宮 博

大山参りは数年前に「ホントに歩く大山街道」の本のガイドで歩いたので、三の鳥居からは同じコースでしたが、道路環境が変わり石碑などが見られなくなっていま

したが町屋史跡巡りの標識などは充実してきてましたし、単に目標をめざし歩くのと今回のように細かくご案内をいただくのでは全く異なる印象を受け、新しく色々と教えていただけた博物館のフィールドワークらしい有意義な一日を楽しみました。

- ①各地からの大山道があるとは聞いていましたが、実際に田村通りや柏尾通りなどがあることや、それらを具体的に歩かれた人の本（先述書籍の著書）があることなども教えてもらえ、このような本も読んでみたくなりましたのはほんの一例です。
- ②今回一番印象に残ったのは講の宿坊や色々なまねき、講名の入った石垣根などで、次々と眺めながら進み、昔の大山参りの組織の偉大さを実感しました。木太刀の奉納が今も行われていることや江戸のお花講の人が元禄時代から今も登拝門を開く事も現地で初めて知りました。
- ③比々多神社の以前は削られた安産願いの向拝の柱の風習にも興味があった。ここの木製の狛犬は日本でも古いとされているようだが、一度お目にかかりたいものだ。
- ④大山の観光産業の形態としてみやげやが大きく占めますが、米屋の山菜つくだにや良弁まんじゅうなどの特産品の中での目玉も教えていただきました。このような地域の物産を眺めたり、味わったりなどの五感で楽しむフィールドワークのよさが出ていました。
- ⑤下社の4℃の気温にもめげず色々と見せていただき、下社からの登りの階段を見上げて今まではここを上っていったのだなど、今日の天候の中での大勢の下山の人々の頑張りには感心しましたし、二重滝の最後のみそぎの話にも納得しました。



- ⑥今回は初めて大山寺の不動さん他の内陣を見せていただけたし、小田急ハイキングの日として下社で駅長さんや巫女さん達と記念写真を撮るというサービスを受

けました。またケーブルの運転手の横の席も初体験で、運転操作なども知れました。本当にいい日がフィールドワーク日になりました。

今回は加藤先生が各所で直接ご案内、説明をしていたので、従来より幅広い分野の分かり易かった大山参りとなりまして、上記他の色々な新しく興味のあることと接することが出来ました。下見他の準備をしていただいた相模原の方々に深く感謝しています。次の横浜側が準備する交流会も皆さんに喜んでいただけたらと思います。

### 「みんなが知らない大山参道」を歩いて 長田 文美

大山道、矢倉沢往還は、ほぼ現在の国道246号線のこと、私の住まいから近く、「に・よん・ろく」と呼んで親しんでいる。また、大山は横浜に住み始めて十数年、毎日のように眺めて、その「神名火山」にふさわしい姿が富士山と同じくらいに好きな山だ。今回の相模原の皆さんとの交流会は、ちょっと変わった大山参道を歩くということでも楽しみにしていた。

メ引でバスを降りて歩き始めると、沿道の家々の花々の美しさに見とれてしまった。目を上げると、一段と大きく見える大山の緑の美しさにも感激した。「来てよかった、その①」と心の中で指を折った。

大山の阿夫利神社下社を目指す道は、いつも私が車で通過する道ではなく、旧参道を歩いた。良弁まんじゅうの店もいつもはあつという間に通り過ぎるのだが、今回は初めて味わうことができた。御師といわれる先導師の人たちの家が並んでいる前を通り過ぎながら、今でもこんなに残っているのだと思った。招き板が掲げられて、読んでいくと横浜などの身近な名前を見つけた。「来てよかった、その②」

さらに歩き進むにつれて次第に勾配がきつくなり、息がきれてきた。一緒に歩いている相模原の皆さんは、歩くことが本当に好きで心から楽しんで歩いておられるという様子が伝わってきた。私も皆さんとおしゃべりしながらその楽しい雰囲気に取り込まれて楽しかった。「来てよかった、その③」

茶湯寺では珍しい釈迦涅槃像と徳本上人の六字名号塔を見た。この字体は相模川交流会のときにも見る事ができたものだ。「来てよかった、その④」

江戸っ子は夏の短い一か月の間、我も我もと大山詣で大山を目指したそう。今、私も歩いてみて、大山はやはり特別な山だと思った。昔は大変だった山登りも、今はかわいらしい赤色と緑色をした上下二台のケーブルカーで、大山の新緑と下界の街を見下ろしながら下社まで行くことができる。それでもやっと階段を登りきって下

社に参拝し、登拝門の扉がいつもの半開きではなく全開していたのを見たときは「来てよかった、その⑤」と思った。

今回の大山では私が初めて見る事がいくつもあった。大山を降りてから後も、「来てよかった、その⑥」もあって、楽しかったが省略する。私たちは、もう早くも次の交流会へと気持ちが動いている。これからもずっと、楽しく一緒に歩き続けたいと思う。

### 神仏混淆と廃仏毀釈の残映

～4/20 大山道歩きの所感

小松崎 勇

一行26名、伊勢原駅から大山ケーブルバス停に向かう路線バスを途中下車し徒歩とケーブルでひとまず大山下社を目指す。大山の端整な山容が次第に大きくなる。大山はかつて教師時代に中学生を引率して何度も登った山であるが、それはスポーツ登山の話、今回はその頂上には登らず、下社から横にそれて重要文化財の開扉期間中であった谷間の大山寺を訪れるという貴重な体験をした。約半日の行程は、事前踏査をふまえた加藤さんの要を得た解説により本来の信仰登山の歴史に触れる収穫の多い一日となった。

御師宿の軒端に並ぶ招き板 旧道を北上してゆくと、両側に〈先導師〉や〈宿坊〉の看板が目につくようになる。そして軒先には宿泊客の団体名を記した〈招き板〉と称する古い木札が古色を帯びてぶら下がり、この門前町の往時の盛況を偲ばせる。木札の文字からは、宿泊客は講を組んで参詣したこと、町ごとに定宿があったこと等が分かる。宿泊したのは、朝な夕なにピラミット型の優美な山容を眺めて育った武相の民衆が大半であったろうが、この門前町が最も賑わいを見せたのはいつ頃だったのか？江戸期か、近代以降か。毎晩どのくらいの客が宿泊したのか？

案内書には最盛期は江戸中期以降、年間10万とある。また、客を宿泊させ、翌日の社寺参拝と祈禱を世話した先導師を、江戸期は御師（おし）と称したが、天保12年成立の〈新編相模国風土記稿〉によれば、その数は表口の坂本村・裏口の蓑毛村併せて166軒確認できる。この山峡の地にずいぶん多くの宿泊客が草鞋を脱いだものである。山岳信仰に根ざした山の靈気に触れるという魅力は当然として、江戸期の商人と周辺農民層に、旅という誰もが願う日常性からの脱却を可能にする幾分かの生活のゆとりが、出てきたことも否定できないであろう。

そして、門前町大山は明治期を迎え、明治政府によって、神仏分離が断行されると次第に衰退に向かう。明治初期成立の〈開導記〉では120軒、明治後期の〈相州大山案

内記)では81軒と漸減してゆく。

神仏の逆になりぬる御一新 3年前、民俗に親しむ会の仲間とともに鶴見川流域を丁寧に踏査した際に、町田市の路傍でことごとく首を切断され、草むらに放置されている一群の石仏に遭遇し、維新時の廃仏毀釈の嵐の強さに仰天した記憶がある。維新時、全国津々浦々でどういう嵐が吹いたのか、どういう人物団体が加担したのかを調べてみたいと思ひながら、怠惰のため放置していた。ところが犬も歩けば棒に当たる、今回の大山街道探索に参加して、図らずも明治期にこの地でその廃仏毀釈運動に辣腕を振った〈権田直助〉という、中央では無名ながら、当地では隠れもない有名人の存在を知りうる契機となった。明治初年の太政官布告により、大山寺は、阿夫利神社と変わり、そして本堂(不動堂)が数丁下がった現在地に移され、その他仏寺は全て破壊された。跡地に下社神社の拝殿が建築された。この大号令のおかげで、それまで仏教勢の陰に隠れていた神道勢力が日の当たる地位を得て、代わりに仏教勢力が日陰に押しやられた。大山に居住した僧職者は、山を下りるわけにもゆかず右往左往の結果、やむなく神官・祢宜等に変身したのであろうか。

### 第3回「大山参り」の感想 加藤 節男

今回も加藤先生の詳細で懇切丁寧な解説は幅広い分野にわたり有意義でさらなる好奇心を駆り立てる交流会でした。以下、「大山」という町の印象と印象に残った風景について記します。

#### ◎「大山」という町の印象

①石の町 先ず、降りたバス停の名称からしてよかった。「メ引」。明らかにここに「メ縄を引き」、聖域への入り口を表わした地名と思われ、大山参りの出発点としては申し分ありませんでした。

石の町という印象はその「メ引」バス停から東名をくぐった先の大山阿夫利神社の大きな石作りの二の鳥居から始まり、歩くうちに、石の塀で囲まれた古い住宅(農家)が多い事に気づき、それは第2東名建設で潤ったと思われる新築豪邸の立派な長い石塀を見て、強くなりました。その後、石垣の崖、先導師の家(旅館)の門前や周囲の寄進者の氏名などが大きく刻み込まれた玉垣、そして各地からの講中の記念石碑、とりわけ、鳶、建設関係の講中の派手さを競うような石碑群、そしてコマ参道の石段と滑らかな石畳の道。数多くの石仏、六字名号塔などの石塔、「茶湯寺」としるした石塔だけでなく、立派な自然石が目立つ町でした。

②お稲荷さんの多い町 もうひとつ気づいたのが数多く

のお稲荷さん。江戸もかくやと思ひながら歩きました。

檜皮葺きの小さな祠、立派な一戸建ての小屋ほどの大きさの祠、荒れた広場の片隅にそだけ残された鳥居と祠、電信柱の影に隠れる崖下の祠、吠える犬の小屋の前に置かれ犬の番小屋のような石の祠、五葉松(?)の盆栽の中に埋もれている石の祠、立派な石の鳥居をかまえる農家、赤い鳥居だけでなく黒い鳥居のお稲荷さんも。途中の石屋さんでは石の祠を販売、その内、石の祠のお稲荷さんの町になるのでは。

③依然として門前町 もっとも印象が強かったのはやはり「信仰の町」、「門前町」としての大山でした。

子易明神・比比多神社の向拝の柱。「ごはい」とは初めて知った言葉。二本の柱とも根元近くが安産祈願で大きく削られ、しかも、向かって左側が男子の安産を願うとかで右の女兒の安産を願う柱よりもかなりやせ細っているのが、労働力としての男を期待する農村部の人たちの素直な思いを反映する象徴として面白かった。それにしても、祈願成就の「御礼」は何だったのだろうか?

「三の鳥居前」からは、桜井徳太郎氏の『門前町の移り変わり』所載の昭和35年頃と思われる「大山門前町の見取り図」を見ながら、この門前町がどう変化しているか、特に先導師の家がどうなっているかを確認しながら歩いてみました。確認は、途中のあたご滝(橋)付近まで行いました。

旅館になっている家が多かったのですが、ほとんどが先導師の家である事を明示し、「見取り図」と同じ場所に残っていました。門だけ残っている空地や最近まで居住していたと思われる廃屋もありましたが、結局、バス通りを含め約20数軒の現存を確認できました。

ケーブルの「阿夫利神社駅」から「大山阿夫利神社下社」までの参道の玉垣寄進者の名前を記した石碑が参道の途中にありましたが、その名簿の最下段は大山参りを支えてきたことを象徴するかのように先導師の名前一覧でした。その数、57(54だったか?)名。

桜井氏の「門前町の移り変わり」では『こんにちの大山町は、だいたい180戸の戸数のうち、木地細工の家が約20戸、それを売っている店が約30戸、御師(先導師)の院坊が約70戸に上っている』としています。玉垣寄進が行われた年は確認しそびれましたが、この変化が激しかった時代に約80%近くの先導師が残っていたことはちょっとした奇跡に思えました。

帰宅後調べた産業能率大学のサイト「丹沢・大山歴史街道ものがたり デジタルアーカイブ」によれば、「新編相模国風土記稿によれば、御師(師職)は166軒

を数えたとされ、寛政9年(1797年)の東海道名所図会では、165余(大山150余、蓑毛15)、明治19年には81戸、大正6年には75戸、昭和63年には56名の先導師数が挙げられる。なお現在(平成22年3月)は、先導師46戸(内、先導師に加え旅館を営む者41戸、先導師のみの者5戸)である。」でした。

また、コマ参道の両側の店の店員が、上っていく人たちに「行ってらっしゃい」、そして、下ってくる人たちに「お帰りなさい」と声をかけていましたが、それが客引きのトークとしても、門前町の良き雰囲気を出していました。

◎その他印象に残った場所や風景など(ほとんどが上記

③の続きでもありますが・・・)

①子易明神・比比多神社裏の道祖神(庚申塔)とその周囲に置かれたゴロ石：境のサイト場。

②「旧ふたつばし」付近：一瞬の旧道。

③権田公園隣接の神道の墓地、そして、権田直助の墓の威容さと忘れられた大山能の祖・貴志又七郎の墓石。

④茶湯寺の石段(橋を渡った所)から始まる全くの別世界：神道の大山とは明らかに違う世界。

⑤山ガールと中国系登山者の多さ：観光地としての大山。

⑥大山寺の奉讃額：参拝記念の石碑とはまた異なる信仰心のあらわれ。

大山寺のパンフレットの文章：廃仏毀釈。

「権田直助に率いられた暴徒たちがこのお不動様を破壊しようとして・・・」、

「周辺の主だった寺院が数十年以上にわたって活動できなかったのに比べ、・・・」

◎まとめ

高尾山に劣るとは思えません。ミシュランの三つ星を目指し、自然林の保護・育成と自然観察施設の充実と安全面の整備を期待します。

### 「大山参り」をしながら考えたこと 久世 辰男

大山は沢登りを含めて4回は登ったことがあり、よく知っているつもりでしたが、今回は、今まであまり知らなかった山麓から中腹にかけて加藤先生の案内・解説で歩くことができ、いくつかの収穫がありました。このような機会を与えていただき感謝申し上げます。

特に印象的だったのは、追分(ケーブル駅)から上のエリアと下のエリアの違いです。

上のエリアは宗教施設が中心のエリアで、神仏分離・廃仏毀釈によって決定的な影響を受けています。大山信仰の中心であった不動堂やその他の仏教施設・仏教色がすべて取り払われ、祭神の石尊権現が捨て去られ、そ

の跡に見ず知らずの神(大山祇大神)を祭った新しい社殿が建てられました。景観的にもまた教学的にも明らかな断絶があり、全く別の宗教に変わったといわざるを得ない状況です。僅かに、加藤先生に引っ張り上げられた前不動堂跡地(八意思兼神社)の景観が昔の姿をとどめているようです。

追分より下のエリアは、土産店・先導師の家・民家など、人々の生活が営まれるエリアです。ここではかつての御師は先導師と名を変えていますが、土産店街、豆腐やコマやキャラブキ、先導師街の景観、大山灯籠、大山講中の看板や札、講や寄進者の名を刻んだ石柵などに、江戸時代からの大山詣での風習や伝統、大山信仰などが生き続けているように感じました。上のエリアで仏教が壊滅し祭神が代わろうとも、下のエリアはしぶとく生き延びるのです。

宗教学的・歴史学的にはともかく、人々の生活や民俗の中に、別の言い方をすれば「民俗学的には」、大山信仰は連続して生きているらしい、と感じました。

ただ、自分はどちらかという未だ「歴史側の人間」であるらしく、現在の生活・民俗のどの部分が江戸時代・神仏分離以前から由来し、どの部分が明治・神仏分離以降の所産であるのかを明らかにしたいという気持ちを捨てきれません。うまく言い表せませんが、現在の生活・民俗の中に投影された「過去」は一つではなく色々なフェーズがあり、異なるフェーズの「過去」に由来する要素を一つのコンテキスト(文脈・共伴関係)で語っているのか?という疑問です。

一般に大山は古来、雨乞いの山であったとされますが、雨乞い祈願の対象が大山に収斂していったのは意外に歴史が浅く、神仏分離・廃仏毀釈後の大山御師(先導師)の生き残り戦略の成果である、という説もあります。良弁の滝に隣接する墓地で、一つの家の墓所に仏教形式の墓碑と神道形式の墓碑が併存していました。これをもし単純に神仏融合的な民俗と解するとしたら多分それは正しい理解ではなく(この神仏併存の墓前でどのような祖先供養儀礼が行われるのか興味はありますが)、神仏分離・廃仏毀釈という歴史事実との因果関係、「過去のフェーズ」の違いをクリアにしてから理解することが先決と思われる。

・・・というようなことを考えながら歩いた一日でした。

### 第3回交流会「みんなが知らない大山参り」に参加して

下村 信子

私の住んでいる川崎市宮前区は坂の多い町で随所から

富士山が眺められます。富士山の足元には丹沢の山並みが広がり、その一番端に山頂を際立たせているのが大山です。江戸の町からも眺められたであろうこれらの山々の姿は絵画の様に美しく、特に夕日を背にしたシルエットは神々しくさえ思えます。富士山、大山は共に江戸後期に「講」による参拝が盛んに行なわれたとのことですが、その大きな要因としてこれらの山々の神々しい美しさによる効果があるのではと以前から私は思っていました。また、家から実際に大山を眺められるだけでなく、家の近くを走る国道246号に沿うように「旧大山街道」が存在しているので、以前から「大山参り」にも関心がありました。しかし大山に実際に訪れたのはごく最近で、またその時は車とケーブルカーで阿夫利神社下社に訪れただけでした。その為、今回のフィールドワークへの参加をととても楽しみにしておりました。実際に参加してみて、加藤先生のご説明や頂いた資料から「大山参り」について多くを知る事が出来た事に加え、実際に現地を歩いて登ったことで、古代からとも言われる大山信仰の源と思われる大山の神秘的な一面を実際に体感することが出来ました。

当日のコースは加藤先生ならではのものでした。伊勢原駅から乗ったバスは、他の大山登山観光客と違い産業能率大行きバス、下車した場所も大山参道にはほど遠いと思われるメ引バス停でした。しかしそこには、大山道のひとつ、田村通大山道の二の鳥居があり、山頂の社からこの様に離れた場所に二の鳥居がある事を知り驚きました。が、更に藤沢に一の鳥居がある事を聞き、そのスケールの大きさが過去の大山信仰の盛んさを表しているように感じました。

そこから大山中腹の下社目指してフィールドワークがスタートしました。江戸時代の大山講の人々は隅田川の両国橋での水垢離の後、大山までの長い道のりを延々と歩いてきました。私達はその最後のハイライトを体感しているのみですが、徐々に勾配がきつくなる坂を登っていると、大山の聖域に一步一步近づいて行くという神聖な気持ちになっている自分に気がきました。特に、「講」の人々を先導師が迎えに下りてきたという比々多神社は興味深く、その先の神域に一步足を踏み入れる緊張感を体感しました。あたかも地面に俗世と神域の見えない一線が引かれているように感じました。

更に進んで、先導師の住んでいた地域を通ったときも、家々の重厚な門構えや軒下の「板まねき」に往時の面影が残り、森閑な空気の中にも俗世とは違う独特な感覚を覚えました。

また茶湯寺で「親しい人が亡くなった100日目にここ

を訪れると故人とそっくりな人と出会うことが出来る」という説明を聞いた時はちょっと背筋が寒くなりましたが、登りながら感じてきた、大山がただビジュアルの美しい山ではなく、何か特別な霊山であるという思いが更に強くなりました。

日本人は古来自然や生活の中に神を感じ、それらの神々を畏敬の思いで大切にしてきました。私は自然の中でも特に山と水に対する思いが日本人は強いように思います。今回、実際に自分の足で参道を歩いて登ったことで、前回に車で来た時には感じられなかった自分の奥底にある山に対する畏敬の念を認識する事が出来ました。古来は修験道の山でもあったと言う大山には、何か他の山とは違う力があることも強く実感しました。同時に、往時に比べると水量が減ったとはいえ、雨降山とも呼ばれ、雨乞いの山でもあった大山には今でも随所に豊かな水を有す川や滝があり、まさに水したたる、水にあふれる山であるという印象を私は受けました。霊山と水、この2つにおいて、この大山という山が多くの人々にとって信仰の対象となっていた意味合いの一端を感じる事が出来、非常に有意義なフィールドワークとなりました。

加えて、私達がフィールドワークを行なってきた鶴見川流域と大山との関係に興味を湧きました。鶴見川フィールドワークの際に訪れた鶴見川の上流と中流に架かる「精進橋」、「精進場橋」では大山に雨乞いに行く人々が水垢離を行なったと思われる。あらためて、鶴見川流域の人々にとっての「大山参り」の意味合いや、江戸の人々との違いにも思いが広がりました。

最後になりましたが、お顔なじみとなった相模原の皆さんとのフィールドワークは色々学ぶことが多く大変に有り難い機会です。楽しいフィールドワークを有難うございました。加藤先生と相模原の皆さんに感謝申し上げます。

【付録】最近狛犬に興味があるので、今回の大山フィールドワークで出会った狛犬達を紹介します。



<写真1>



<写真2>



&lt;写真3&gt;



&lt;写真4&gt;

- <写真1> 比々多神社にて。常夜燈の台座に乗っているのが珍しい。  
頭を下げておしりを持ち上げている姿もユニーク。西日本に多い姿らしい。
- <写真2> 下社にて。胸をはり前足をつっぱって空に吼えているような姿が力強い。昭和11年奉納。
- <写真3> 下社にて。獅子山。日本三大獅子山といわれたものが関東大震災で消失して昨年再現された。
- <写真4> 先導師の家並みの一角にて。獅子山。親獅子と子獅子の谷落としの様子。下社のものより古くて味わいがある。

### 第3回交流会に参加して 林 浩一

4月20日(土)相模原市立博物館民俗調査会の方々と3回目になる交流会に参加させていただいた。引率は相模原市立博物館の加藤隆志先生。丁寧でわかり易いご説明に聞き入りました。

歩き出すぐ、田村通り大山道の嘉永四年に再建された二の鳥居に「十日市場 佐藤安五郎」と刻まれていて、聞き覚えのある地名が出てきたので興味を引いたのですが、当日いただいた資料に「嘉永四年一月に木製から石製の鳥居に再建、大正12年の関東大震災で壊れたものを昭和3年に再び建て直している」と書かれているのを家に帰って読み、佐藤安五郎はどっちの再建に関わっていたのか、もっとよく見ておくべきだった…、と後悔しました。そして石倉バス停に来た時、以前来た時とは違った景色に愕然としました。建物の基礎部分だけが残され、変わってしまった風景を何枚も写真に撮りました。バス停にあった石造物はここに帰ってこられるのでしょうか？

民俗に親しむ会では石工を調べる事になったので石工が気になりました。比々多神社の鳥居代石に「大山町 石工 幸吉 梅吉」慶應元年再建。三の鳥居の鳥居前バ

ス停に「石工 露木浅次郎」と書かれた石碑があり、これはなんの石碑だったのか、当日撮った写真には「神奈川県知事従四位勲三等有吉忠一書」の部分しかなく、あの時石碑の周りを一回りしてもっとよく見ておくべきだったと再び後悔しました。

先導師集落で「歓迎 代参講御一行様」の看板を見て、今も続いている大山講に感心しました。お昼を食べた権田公園で権田直助の碑に「石工 露木浅次郎」を確認して、下社をお参りしたあと、昭和33年建立の大天狗の碑、「石工 露木久吉刻」、昭和37年の横浜清心講の献燈記念碑に「石工 露木久吉」を確認しました。露木家はこの辺りの石屋さんなのか？ 浅次郎さん、久吉さんの関係は？ 比々多神社の幸吉さん、梅吉さんは？ など疑問が湧いてきました。

今回の感想文提出の宿題がなければ、写真を見直すこともなく、自分の見方の甘さがわからずにいたかもしれません。これからは少しでも後悔する回数が減るように、しっかりと確認していきたいと思いました。有難うございました。

### 第3回交流会「大山参り」所感 牧野 秀樹

実は当家と大山の繋がり意外に深く、祖父がかつて阿夫利神社の神主と親しくしていたようで、弟の名前や庭の灯籠も頂いたものと聞いている。それにもかかわらず、私は一度も大山を訪れたことがなく、今般、大山周辺を回る機会に恵まれ、感慨深いものがあつた。

大山周辺を廻った際、気になった点が3件ある。以下にその内容を簡単に整理した。

- ① 信仰を中心とした観光と登山の顔 9時30分伊勢原駅前発のバスで「メ引」で下車したが、既に伊勢原駅には軽登山の装いの人であふれており、バス停にはケーブルカー乗り場へ行く人が列を作っていた。こうした方々のほとんどは山頂まで行く人たちであったが、バスに乗ると「どこから来た？ 少し遅いね」と声を掛けられた。「9時30分で遅いのか！」観光地ではない時間間隔といえるだろう。ただし、駅前には昭和のモードたっぷりの「ようこそ伊勢原へ」のアーケードなどがかり、古い観光地の雰囲気が漂う街並みであった。
- ② 街並みの変化 「メ引」より暫くは農業が主体化と思われる家並みが続く。比々多神社を越えると街並みの様相は徐々に変化する。特に、二ツ橋付近より「何々坊」等と書かれた宿坊が目につくようになる。大山全山には50の宿坊があるとのことだが、それぞれ先達の名が入った大山講の名前が掲

げられ、さぞや活気があったであろうことがしのばれる。



### ③ 阿夫利神社と大山寺

中世以降は大山寺を拠点とする修験道（大山修験）が盛んになり、源頼朝を始め、北条氏・徳川氏など、武家の崇敬を受けた。江戸時代には当社に参詣する講（大山講）が関東各地に組織され、多くの庶民が参詣した。

明治時代になると神仏分離令を機に巻き起こった廃仏毀釈の大波に、強い勢力を保持していた大山寺も不動堂は壊されてその地に阿夫利神社下社が建立、大山寺は現在地に移されたとのことである。明治6年（1873年）、阿夫利神社は県社に列格し、信仰対象として隆盛を極めることとなるが、大山寺の方は多くの文化財が逸材し、両雄というほどの状態ではないようである。

当日は大山だけに雨にも降られ、加藤先生や相模原の方々には大変ご迷惑とご心労をおかけしたのではないかと思います、心苦しい限りであります。また、予約でなけれ



ばなかなか手に入らないという良弁饅頭もお手配いただき、誠にありがとうございました。「ある人が日本で二番目にうまいと言った」ということだったかと思いますが、順番はわかりませんが確かにおいしくいただきました。

また、相模原調査会の方々よりオレンジのお菓子の差し入れも頂戴し恐悦です。本当に何から何までありがとうございました。

今回も上記のレポートを見ると、いずれの方も今回設定したコースの意図を的確に汲み取っていただき、普段はバスで真っ直ぐ向かってしまう大山も実はその途中にいくつもの大事な見所があることに触れ、それらを実際に見聞することでフィールドワークの幅がぐっと膨らむことを指摘されている。そして、その中から参加された各自がみずからの興味関心に基づきつつ、レポートをまとめられている。フィールドワークの重要な視点は、普段、自分たちが当たり前と思っていることでも少し見方を変えると異なった姿が現れ、それによってさまざまなことを考えることにあるが、今回のようなお互いに離れた場所のフィールドワークを通じて改めて自らが生活する地



域を見直すとともに、相模原・横浜ともに地域の民俗を考える上でも欠かせない大山で行った今回の交流会もそうした体験をしていただけたのではないかと思われる。いずれにしても、今後とも相模原市立博物館・民俗調査会と横浜市歴史博物館・民俗に親しむ会の交流が深まり、お互いに楽しく良い関係が保たれながら着実な活動が展開されることを望んでいる。今後とも両博物館の市民の会の一層の交流を図り、それぞれの館の活動に反映させていくとともに、継続的に成果を蓄積し、また、課題を明らかにしていきたいと考えている（注6）。

#### 注

- (1) 現在のところ、民俗調査会A（活動日：毎月第二水曜日）及び民俗調査会B（活動日：毎月第四土曜日）のほか、津久井郷土資料室の収蔵資料の整理・目録化を目的とする水曜会（活動日：毎月奇数週の水曜日）、有形の民俗資料の整理や展示を行う福の会（毎月奇数週の木曜日）を実施している。
- (2) 本館と横浜市歴史博物館の交流会を開催した経緯については、昨年の『研究報告』第21集に記した。
- (3) 二つの民俗調査会の結成の経過については、拙稿「歩く・聞く・見る・展示する～秋季企画展「市民と歩いた横浜への道」開催記録と民俗調査会の活動～」『相模原市立博物館研究報告』第19集 2010 で紹介した。
- (4) 第一回目は平成24年3月14日に南区新磯地区、第二回目は11月14日に中央区田名地区、第三回目は25年5月9日に南区下溝地区、第四回目を11月13日に町田市相原町・相模原市緑区相原地区で開催した。
- (5) 「民俗の見方、調べ方」講座の内容や、その後の「民俗に親しむ会」のフィールドワークの経過等については、横浜市博の民俗担当学芸員である刈田 均氏が「市民協働による市域の民俗調査」と称して同館の『調査研究報告』第5集（2009）から毎年状況についてその都度報告されており、現在、第9号（2013）まで刊行されている。なお、この第9号には、24年10月13日（土）に実施した第二回目の交流会である横浜市鶴見区でのフィールドワークの内容と、参加した民俗調査会Aの会員の感想文について掲載されている。
- (6) 本稿は、刈田・羽毛田氏と調整しながら加藤が執筆した。なお、横浜市立歴史博物館の『調査研究報告』には加藤と調整の上、刈田氏が執筆の予定である。



唯念六字名号塔を熱心に見る両会の会員



八重桜が満開であった



大山阿夫利神社 下社



春山の期間のため、普段は片開きの門が両開きとなっていた



先導師の家に掲げられた大山講代参の一同を迎える表示